

巻頭言

When patients and researchers work together toward a common goal, advances can be made.

国立病院機構 近畿中央胸部疾患センター

臨床研究センター 呼吸不全・難治性肺疾患研究部長 井 上 義 一

同窓会の皆様、ご無沙汰しております。私は生まれ故郷である愛媛を離れてから、早いもので19年になり、大阪が第二の故郷になりつつあります。現在、大阪府堺市にある呼吸器専門施設、国立病院機構近畿中央胸部疾患センターで、日々、診療、研究、教育、最近は管理のための会議や出張に追われる日々を過ごしています。私の役職は、小さな研究室を任された研究部長ですが、基本的に軸足は臨床医として、患者から学び、患者に還元する診療と研究を心がけてまいりました。

私は、入局後、様々な呼吸器疾患の診療、研究を行ってきましたが、歳を取るにしたがって徐々にびまん性肺疾患の診療と研究に傾いてゆきました。研究面では、間質性肺炎/肺線維症、リンパ脈管筋腫症（LAM）、肺胞蛋白症、ランゲルハンス細胞組織球症疾患などの難治性稀少肺疾患の先進的診療と研究、更に患者支援活動や政策医療にも取り組んでいます。

本稿では、私が取り組んできた仕事の中で、成果を上げつつあるLAMについてこれまでの経験をご紹介させていただき、巻頭言としたいと思います。

私は1988年大学院を卒業後、国立療養所愛媛病院で勤務をはじめました。ある日、前医で特発性間質性肺炎と診断された一人の若い女性患者の主治医になりました。苦勞して付けた診断はLAMでした。当時LAMに関する情報はほとんど無く、大学時代に指導医であった故橋本明栄先生のご意見や論文を頼りに診療を開始しました。子供の手と酸素ボンベを両手でしっかり握り、父兄参観や家事をこなされる姿に感銘を受けました。有効な治療法がないとされるLAM患者との初めての出会いでしたが、1993年、

京都でLAMに関する国際症例検討会が開催されました。私は愛媛の患者をまとめて発表させていただきました。

その後愛媛大学に戻り、1994年から、米国、デンバーにあるNational Jewish Center for Immunology and Respiratory Medicineへ留学する機会を与えられました。職業環境呼吸器科Lee S. Newman先生の研究室で肺の肉芽腫や線維化の研究を行いながら、積極的に職業環境肺疾患、びまん性肺疾患の勉強をさせていただき、LAM患者の資料も数多く見せていただきました。1997年、帰国し、国立療養所近畿中央病院（現在国立病院機構近畿中央胸部疾患センター）で勤務いたしました。帰国後まもなく、同院でLAMを疑われながら確定診断に至らなかった若い姉妹例を受け持ちました。私は画像所見から直ちにLAMではないと判断しました。最終診断は特殊な家族性肺線維症でした。1999年、厚生省研究費をいただき国立病院におけるLAMと結節性硬化症の全国調査を行いました。肺線維症とLAMの類似点が気になっていた私は、2002年特発性肺線維症、LAMにおけるマスト細胞、筋線維芽細胞、LAM細胞について紙上発表いたしました。

2003年、米国でNIH予算により稀少難病研究の基盤として稀少疾患臨床研究ネットワークが始動しました。呼吸器領域はシンシナティ大学の先生方が中心となり、稀少肺疾患コンソーシアム（RLDC）が設立されました。私は、シアトルで開催された会議に参加し、LAMと肺胞蛋白症の分野で研究に参画する事になりました。LAMの重要研究として、米国シンシナティ大学Frank McCormack先生による、シロリムス（ラパマイシン）を用いたLAMの医師主導治験（MILES試験）に当初から参画する事になりました。MILES試験は、米国患者会「LAM Foundation」、我が国の患者会「J-LAMの会」はじめ、多くの患者の支援により実施されました。MILES試験は、英語の契約書、QOL調査票の翻訳と、使用許可の取得から始まり、病院を挙げて準備し実施いたしました。また、患者への情報提供のため、2003年から患者（会）、家族、医師、研究者による合同勉強会を大阪で企画しました（第1回、第2回LAM勉強会）。その後、厚労科研研究班（呼吸不全班）の研究補助を得て、年1回大阪と東京で交互に勉強会を開催するようになりました。呼吸不全研究班では、私たちはLAMの特定疾患認定に向けた活動を続け、2009年から特定疾患、患者は医療費の補助を受けることが出来るようになりました。

MILES試験の結果、LAM治療薬としてラパマイシンの有効性、安全性、血清バイオマーカーの意義が証明されました。2011年3月11日、東日本を襲った大震災の直後の、3月16日、その成果はNew England Journal of Medicineにて紙上発表されまし

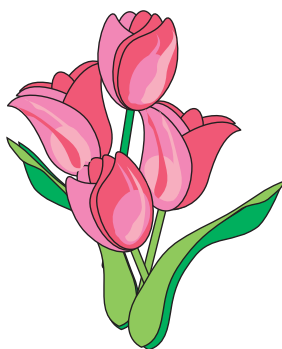
た。更に付随研究として、新たな非侵襲的診断法開発、QOLの検討も順次発表されました。

2011年、我々は大阪で第10回LAM勉強会を開催しました。MILES試験主任研究者であるMcCormack先生が来日され、試験に参加した患者様達へ感謝を述べられ、MILES試験の結果報告をされました。現在、厚労省、PMDAの指導のもと、第3相オープン試験を医師主導治験として実施しております。順調に行けば2014年後半には、ラパマイシンの承認を得られる事を期待しています。

2011年、当院に稀少肺疾患外来が開設されました。最近はLAM患者が、近畿地区だけでなく、西日本、中部北陸地方から、更に韓国、台湾からも来院するようになりました。

最初の巻頭言はMILES試験発表時、Editorial書かれていた文章です(N Engl J Med. 364(17) : 1670, 2011)。「昔は不可能と考えられた稀少疾患の進歩は、患者と研究者が共通のゴールを目指す事で可能となる(意識)」との意味です。私は、LAMの様な超稀少疾患では、その克服には、患者/家族、研究者/医療従事者に加えて、さらに厚労省等の公的機関、そして製薬等の企業の4者が同じゴールを目指す事が必要であると考えています。

患者、共同研究者、与えられた診療と研究の場に感謝するとともに、今、私に出来ることは何か、何をなすべきか問いながら、今後も患者から学び、患者に還元する研究を続けて行きたいと思っています。



学 会 記

ISH学会記

愛媛大学大学院病態情報内科学 三 好 賢

シドニーで開催された24th Meeting of the International Society of Hypertension (ISH)に参加してきました。まず、驚かされたのは、レセプション会場にコアラがいたことです。ああ、ついに南半球に来たのだなと実感しました。後から聞いたのですが、コアラは淡路島にもいるそうです。今回のISHは、オーストラリアで開催されたこともあり、ヨーロッパからの参加者は少なく、環太平洋地域（オーストラリア、日本、中国、韓国、USA）からの参加者が多かったです。



私は降圧薬アムロジピンの投与方法に関する研究について発表しました。

1日1回投与は1日2回投与に比べて、24時間血圧、血中濃度に差がなかったという内容でした。デンマークの女医（美人）さんから、興味深い結果ですねと褒めて頂きました。デンマークではアムロジピンは1日1回より1日2回の投与方法が多いよ

うです。学会の発表の中で、興味を持ったもの1つに、高炭水化物食群に比べて高蛋白食群では血圧が低かったというコホートのメタ解析がありました。うどんやラーメンのように「つゆの塩分+麺の炭水化物」という組み合わせは血圧を相加的に上昇させているのかもしれない。

ところで、オーストラリアですが、アジア人もとても多く、多民族国家であることを実感しました。飲み水、電車賃、食事など諸々の物価がとても高いのが意外でした。また、民族性の違いなのか、刺青した人がとても多くて、とまどいましたが、おおむね人々は親切で、治安も良かったです。次回のISHはアテネで開催される予定です。ギリシア危機が解決に向かうことを望みます。

追伸、オペラハウスとハーバーブリッジの写真です。天候に恵まれ、良い写真がとれました。



学 会 記

ERS2012学会記

愛媛大学大学院病態情報内科学 三 好 誠 吾

2012年9月2日から4日までオーストリア・ウィーンで開催されたERSに参加しました。なんだかんだで今年で4回目の出席になるERSですが、昨年と違い今年は山本先生含む3人での出席となり、少し盛り上がりのある学会出張となりました。

松山空港より、羽田、フランクフルトを經由してウィーンへ。

途中伊東先生の荷物がロストバゲッジ（目的地まで荷物が届かないこと）に遭うというアクシデントがありつつも、無事に現地までたどり着きました。

ウィーンの街はだいぶ秋めいてきており、朝と夜が少し肌寒い気温でしたが、日中はとても過ごしやすい気候でした。

私の今回の発表は、急性肺障害に関連した発表でした。これまで、濱田先生がおられたころに始めた基礎研究のデータでの発表でしたので、趣向がだいぶ異なり、発表前は不安と緊張でいっぱいでした。実際、発表もなかなか質問に対してうまく答えることができず、少し悔いの残る学会発表となりました。それでもひとついい経験をさせていただいたと感謝しております。

来年はバルセロナでの開催予定とのことです。英語もしっかりと勉強して、できれば来年も発表したいと思っております。最後に、お忙しいながら付添いただいた伊東先生、代医をしていただいた片山先生、入船先生、そしてこのような機会を与えて下さった檜垣先生に深謝いたします。



学 会 記

ESC2012に参加して

愛媛大学大学院病態情報内科学 飯 尾 千春子

平成24年8月24日から31日までドイツ、ミュンヘンで開催されたESC2012に参加させて頂きました。愛媛大学から井上勝次先生、西村和久先生、飯尾が、喜多医師会病院から斉藤実先生、東晴彦先生が参加しました。

時差はsummer time期間なので日本マイナス7時間でした。宿泊しているホテルから会場へは地下鉄で約30分とアクセス良好で、congress bagを持った大勢の参加者が乗っているので何も考えなくても人の波に乗っていたら会場に到着できるといった感じでした。会場がどれだけ広いかはよく分からないのですがとにかくとても広いのでsessionからsessionへの移動が大変でした。まだ着かない!? もう少しか…と、ひたすら歩きました。驚いたのは学会会場でビールが販売されていて皆で楽しく昼間から飲んでいたことでした。さすがドイツだと感じさせる出来事でした（私たちは飲みませんでした…）。

さて、私が拝聴したprogramの一つを紹介します。

「Fractional flow reserve in complex coronary interventions」, FAME study II のeducational programです。2009年のNEJMにpublishされたFAME studyはMVDに対するFFRガイド下PCIが造影ガイド下のみのPCIよりも優れているというものでした。FAME study IIはstable CADに対してoptimal medical treatment (OMT)+ FFRガイド下PCIもしくはOMTのみを行い、臨床予後、安全性、コスト効果について比較検討したものです。All cause mortality, urgent revascularizationがOMT onlyで有意に高いという結果で、虚血が証明された病変を有する症例は、PCIを行うべきであり、outcomeも改善するということでした。Stable CADの患者さんでAngiographicalに狭窄があるように見えてもFFRをしてみるとそうでもないことはよく経験しますし、逆に狭窄がそうsevereでないように見えてもFFRでは有意な虚血であることも経験します。Revascularizationの必要性をやみくもに見ただけで判断せずにFFRの測定をすることが患者さんの利益につながり、限りある医療財源のためにもなると感じました。これからは診断カテの際に、FFRの出番が更に増えるのだと最新知識を



蓄え、海外学会に出席する醍醐味を感じました。

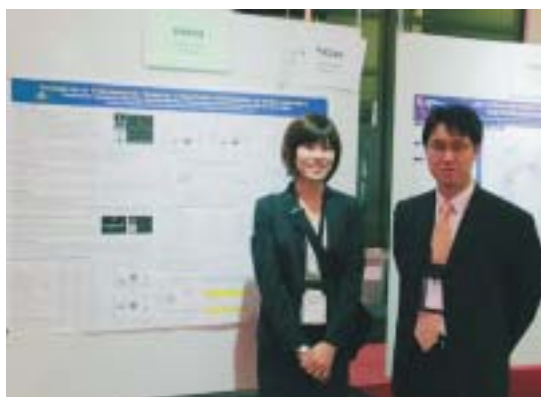
私のposter sessionでは、多くの方々にいろいろな角度からの質問を頂き、自分でなんとか説明できる場合よりも井上先生にお願いすることが圧倒的に多かったです。ほろ苦い気持ちとほっとした気持ちで会場を後にしました。

その夜は、世界一有名なホフブローイハウスのビアガーデンでミュンヘン名物のヴァイスヴルスト(白ソーセージ)などを食べました。ビールをオーダーすると何と1L入りのジョッキで出てきてとても重そうでした。気になるお味ですが非常に飲みやすいと井上先生、西村先生がおっしゃっていました。店内はバンド演奏が行われており賑やかな雰囲気でもとても楽しかったです。

最終日はノイシュバンシュタイン城へも足を伸ばし、現地をしっかりと満喫しました。

ESCから帰ってきて早くも4か月が経過し、この学会記を書いているのですが振り返ってみると本当に夢のような時間でした。演題が採用されたと知った時は、子供を置いて単身で行くのか、連れて行くのか、出席をあきらめるのかで迷いました。どうしようか本当に困った時に、ある先生から「絶対に行っておいで。いろんな面ですごくいい勉強になるから。」と後押しを頂き、実家の母には「連れていく方が移動などがかわいそう。みるから行ってきなさい。」と言ってもらいミュンヘン行きを決意しました。当時1歳8ヶ月の息子と長期間離れたことがなかったので不安でしたが、ちゃんとおばあちゃんの言うことを聞いて留守番してくれていました。家族に助けてもらいながら、出席できてよかったと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さった檜垣實男教授をはじめ、循環器グループおよび第二内科の先生方に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



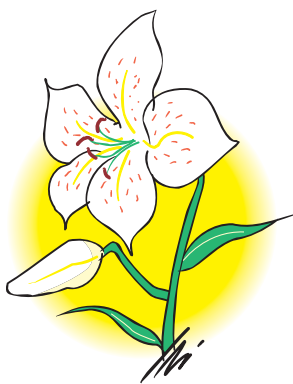
奨励賞受賞のことば

愛媛呼吸循環器病医学研究奨励賞(日和田賞)受賞のことば

喜多医師会病院 循環器内科 東 晴彦

この度は、第10回愛媛呼吸循環器病医学研究奨励賞を頂き、誠にありがとうございました。今回は『冠動脈病変の複雑性評価における非侵襲的動脈硬化指標の有用性～SYNTAX scoreを用いた検討～』という演題を発表させていただきました。近年、冠動脈造影所見からSYNTAX scoreという冠動脈病変の複雑性指標（重症度の指標と言い換えてもよいかもしれません）を検出し、このscoreが高い方が薬剤溶出性ステントによるPCIよりもCABGの方が治療後の予後が良いことが報告されています。今回の研究では、冠動脈造影検査を施行せずとも、SYNTAX scoreが高い症例を最も予測できる非侵襲的動脈硬化検査は何かを検討しました。ABIやbaPWV、AI (augmentation index)などに比較し、頸動脈エコーによるplaque scoreが最もSYNTAX scoreとの相関が強いことが分かり、多変量解析の結果でも糖尿病と並んでhigh SYNTAX scoreの有意な独立規定因子となることを報告しました。

今回からこの愛媛呼吸循環器病医学研究奨励賞は『日和田賞』として生まれ変わり、その第1回の受賞を大変光栄に思っております。このような賞を頂けたのは、研究プランの立て方から統計解析の方法まで直接ご指導頂いた齋藤実先生をはじめ多くの先生方、当院の優秀な臨床検査技師の皆さまのおかげと感謝しております。ありがとうございました。



関連病院業績集

国立病院機構愛媛病院

日本文原著論文

1. 市木 拓, 渡邊 彰, 三好 愛, 佐藤千賀, 阿部聖裕, 西村一孝
肺非結核性抗酸菌症診断における気管支洗浄液検査の有用性に関する検討
気管支学 33 : 232-235, 2011.
2. 市木 拓, 植田聖也 渡邊 彰, 佐藤千賀, 阿部聖裕
胸膜炎を合併した肺非結核性抗酸菌症の検討
日呼吸会誌 49 : 885-889, 2011.
3. 濱田麻紀子, 植田聖也, 阿部聖裕, 渡邊 彰
COPD患者の1日の活動量と運動耐容能, HRQOL等との関連
日本呼吸ケア・リハビリテーション学会雑誌21 : 250-253, 2011.

日本文症例報告

1. 橋田英俊, 船田淳一, 藤田鉄平, 岩田 猛
長期間のピルジカイニド処方中に一過性の心電図異常を呈した高齢者の1例
愛媛医学 30 : 220-223, 2011.

喜多医師会病院

英文原著論文

1. Saito M, Okayama H, Yoshii T, Hiasa G, Sumimoto T, Inaba S, Nishimura K, Inoue K, Ogimoto A, Shigematsu Y, Funada JI, Hamada M, Higaki J.
Myocardial fibrosis attenuates the effect of cibenzoline on left ventricular diastolic function in patients with hypertrophic cardiomyopathy.
J Cardiovasc Pharmacol 57 : 207-212, 2011.
2. Saito M, Okayama H, Yoshii T, Hiasa G, Sumimoto T, Inaba S, Nishimura K, Inoue K, Ogimoto A, Ohtsuka T, Funada JI, Shigematsu Y, Higaki J.
The differences in left ventricular torsional behavior between patients with

hypertrophic cardiomyopathy and hypertensive heart disease.

Int J Cardiol 150 : 301-306, 2011.

3. Higashi H, Inaba S, Nishimura K, Hamagami T, Fujita Y, Ogimoto A, Okayama H,

Higaki J.

Usefulness of adjunctive pulse infusion thrombolysis after failed aspiration for massive intracoronary thrombus.

Can J Cardiol 27 : 869.e1-2, 2011.

4. Higashi H, Inaba S, Ogimoto A, Okura J, Higaki J, Okayama H.

Atherosclerotic renal artery stenosis mimicking fibromuscular dysplasia.

EJVES Extra 22 : e44-e47, 2011.

日本文著書

1. 東 晴彦, 大原貴裕

その原因と最適な治療法は？

症例で学ぶ・循環器診療パーフェクトガイド 総編集

「症例9 僧帽弁置換術後に大動脈弁位機械弁に圧較差出現」北風政史 編集

中山書店 pp57-64, 2011



近畿中央胸部疾患センター

英文原著論文

1. McCormack FX, Inoue Y, Moss J, Singer LG, Strange C, Nakata K, Barker AF, Chapman JT, Brantly ML, Stocks JM, Brown KK, Lynch JP 3rd, Goldberg HJ, Young LR, Kinder BW, Downey GP, Sullivan EJ, Colby TV, McKay RT, Cohen MM, Korbee L, Taveira-DaSilva AM, Lee HS, Krischer JP, Trapnell BC

National Institutes of Health Rare Lung Diseases Consortium; MILES Trial Group. Efficacy and safety of sirolimus in lymphangioleiomyomatosis.

N Engl J Med 364 : 1595-606, 2011.

2. Tachibana K, Inoue Y, Nishiyama A, Sugimoto C, Matsumuro A, Hirose M, Kitaichi M, Akira M, Arai T, Hayashi S, Inoue Y.

Polymyxin-B Hemoperfusion for Acute Exacerbation of Idiopathic Pulmonary Fibrosis : Serum IL-7 as a Prognostic Marker.

Sarcoidosis vasculitis and diffuse lung diseases 28 : 113-22, 2011.

3. Akira M, Inoue Y, Arai T, Okuma T, Kawata Y.
Long-term follow-up high-resolution CT findings in non-specific interstitial pneumonia. *Thorax* 66 : 61-5, 2011.
4. Azuma A, Taguchi Y, Ogura T, (62人省略), Inoue Y, 他
Exploratory analysis of a phase III trial of pirfenidone identifies a subpopulation of patients with idiopathic pulmonary fibrosis as benefiting from treatment.
Respir Res 12 : 143, 2011.
5. Taniguchi H, Kondoh Y, Ebina M, (60人省略), Inoue Y, 他.
The clinical significance of 5% change in vital capacity in patients with idiopathic pulmonary fibrosis : extended analysis of the pirfenidone trial.
Respir Res 12 : 93, 2011.
6. Ishii H, Tazawa R, Kaneko C, Saraya T, Inoue Y, Hamano E, Kogure Y, Tomii K, Terada M, Takada T, Hojo M, Nishida A, Ichiwata T, Trapnell BC, Goto H, Nakata K.
Clinical features of secondary pulmonary alveolar proteinosis : pre-mortem cases in Japan. *Eur Respir J* 37 : 465-8, 2011.
7. Okada M, Kita Y, Kanamaru N, Hashimoto S, Uchiyama Y, Mihara M, Inoue Y, Ohsugi Y, Kishimoto, Sakatani M.
Anti-IL-6 receptor antibody causes less promotion of tuberculosis infection than anti-TNF- α antibody in mice.
Clin Dev Immunol 2011; 2011 : 404929. Epub 2011 Feb 22.
8. Okada M, Kita Y, Nakajima T, Kanamaru N, Hashimoto S, Nagasawa T, Kaneda Y, Yoshida S, Nishida Y, Nakatani H, Takao K, Kishigami C, Nishimatsu S, Sekine Y, Inoue Y, Matsumoto M, McMurray DN, De la Cruz EC, Tan EV, Abalos RM, Burgos JA, Saunderson P, Sakatani M.
Novel therapeutic vaccine : Granulysin and new DNA vaccine against Tuberculosis.
Hum Vaccin 7 : 60-7, 2011.
9. Okada M, Kita Y, Nakajima T, Kanamaru N, Hashimoto S, Nagasawa T, Kaneda Y, Yoshida S, Nishida Y, Nakatani H, Takao K, Kishigami C, Nishimatsu S, Sekine Y, Inoue Y, McMurray DN, Sakatani M.
Novel Prophylactic Vaccine Using a Prime-Boost Method and Hemagglutinating Virus of Japan-Envelope against Tuberculosis.
Clin Dev Immunol 2011 : 549281. Epub 2011 Mar 7.

日本文原著論文

1. 佐々木由美子, 藤本 進, 久保規彦, 光國若也, 牛村美穂子, 八家方代, 中林健一, 井上義一, 鈴木克洋, 林 清二
特発性間質性肺炎における6分間マイペース歩行試験の意義.
日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 21:254-8, 2011.
2. 杉本親寿, 新井 徹, 西山明秀, 井上 康, 香川智子, 審良正則, 松室昭子, 広瀬雅樹, 北市正則, 林 清二, 井上 義一
全肺洗浄を施行した自己免疫性肺胞蛋白症8例の手技, 効果, 安全性の多面的評価.
日呼吸会誌 49:569-576, 2011.

日本文症例報告

1. 竹崎彰夫, 新井 徹, 井上義一, 西山明秀, 北市正則, 林 清二
Pulmonary tumor thrombotic microangiopathyによる急性呼吸不全を呈し, 血清 vascular endothelial growth factor-Dの上昇を認めた胃癌の1剖検例
日本呼吸器学会雑誌 49:890-6, 2011.
2. 倉原 優, 橘 和延, 桂 浩, 井上義一, 鈴木克洋, 北市正則, 林 清二
局所麻酔下胸腔鏡による搔爬とドレナージが有用であったクリプトコッカス膿胸の1例
日呼吸会誌 49:142-147, 2011.

日本文総説

1. 佐々木由美子, 井上義一
肺結核後遺症と肺高血圧.
呼吸器内科 21:189-92, 2011.
2. 井上義一, 新井 徹, 杉本親寿, 広瀬雅樹
LAMとその周辺に対する新規分子標的治療薬の展望
日本胸部臨床 70:1031-9, 2011.
3. 佐々木由美子, 北市正則, 井上義一
自己免疫疾患の周辺疾患と肺病変 4) 慢性好酸球性肺炎
呼吸器内科 20:439-43, 2011.
4. 松井秀夫, 井上義一
特発性間質性肺炎に合併する肺高血圧の診断と治療
最新医学 -The Medical Frontline- 66:83-92, 2011.
5. 井上義一
PFの治療-IPF治療の新展開状況
呼吸器内科 19:583-9, 2011.
6. 井上義一.

リンパ脈管筋腫症（LAM）の治療，LAMの病態，LAMの治療，具体的薬物療法
Annual Review 呼吸器 216-222, 2011.

7. 井上義一，杉本親寿，新井 徹

肺ランゲルハンス細胞組織球症：臨床像と予後. 特集 呼吸不全を来す難治性呼吸器
疾患克服への取り組み

呼吸と循環 59：127-133, 2011.

日本文著書

1. 特発性間質性肺炎

診断と治療の手引き. 改訂第2版

編集者 日本呼吸器学会びまん性肺疾患診断・治療ガイドライン作成委員会

委員長：杉山幸比古.（日本呼吸器学会 びまん性肺疾患学術部会 部会長：井上義一）

南江堂，2011.

その他

1. Inoue Y

APSR RESPIRATORY UPDATES, APSR EDUCATION PUBLICATION 3(5),
Jun. 2011.

2. 井上義一，中田 光 *

難治性稀少疾患リンパ脈管筋腫症にsirolimusが有効-医師主導の国際多施設共同試験で検証-

Medical Tribune 44：47, 2011.

3. 村田 朗，村田喜代史，野間恵之，小林弘祐，桑平一郎，小川浩正，松澤幸範，
藤本圭作，高橋和久，宮澤輝臣・栗本典昭，井上義一，山田佳子，三嶋理晃，
石井芳樹，福田悠

DVDで学ぶ実践呼吸器病学 Ver.1.0. No.1

呼吸器学総論(1)-10 気管支肺胞洗浄(BAL), Dec. 2011.

4. 陶山久司，木浦勝行，滝口裕一，益田典幸，中西洋一，矢野聖二，関 順彦・
江口研二，横井香平，弦間昭彦，小泉 潔・平田知己，中野孝司，瀬山邦明，
井上義一，萩原弘一，中田 光

DVDで学ぶ実践呼吸器病学 Ver.1.0. No.1

呼吸器学総論(1)-10 気管支肺胞洗浄(BAL), No.5

呼吸器疾患へのアプローチ(3)-11

肺ランゲルハンス細胞組織球症(PLCH), Dec. 2011.

5. 井上義一

研究の周辺から-難治性稀少肺疾患研究：患者とともに
「呼吸」30：1031-2, 2011.

6. 林田美江, 瀬山邦明, 井上義一, 平井豊博, 三嶋理晃
特定疾患治療研究事業対象疾患 リンパ脈管筋腫症 (LAM) 認定基準の解説.
厚生労働省難治性疾患克服研究事業呼吸不全に関する調査研究班
日呼吸会誌 49: 67-74, 2011.
7. 井上義一, 寺本友昭, 北市正則, 三森友靖, 岩城洋子, 坂谷光則
4-2. 近畿中央胸部疾患センターにおける気管支肺胞洗浄液中石綿小体計測 (第二報)
平成22年度環境省委託業務. 被認定者等に関する医学的所見に係わる解析調査報告書
気管支肺胞洗浄液を用いた石綿小体等計測技術の確率に関する調査業務 (神山班)
平成23年3月P. 20~P. 26
8. 板東政司, 杉山幸比古, 西岡安彦, 岸 一馬, 井上義一, 谷口 博之, 小倉高志,
本間 栄
ピルフェニドン有効症例検討会のまとめ
厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 びまん性肺疾患に関する調査研究
班 平成22年度 研究報告書別冊. 平成23年3月
9. 井上義一
『肺胞蛋白症の難治化要因の解明と診断, 治療, 管理の標準化と指針の確立』(課題
番号H22-難治一一般-146)
厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 肺胞蛋白症の難治化要因の解明
と診断, 治療, 管理の標準化と指針の確立に関する研究班 平成21年度 総括・分担
研究報告書 P. 2~P. 11平成23年3月
10. 井上義一, 審良正則, 北市正則, 山本 暁, 橘 和延, 新井 徹
特発性非特異性間質性肺炎 (NSIP) 患者の高分解能CT所見の長期変化と予後
厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 びまん性肺疾患に関する調査研究
班 平成22年度 研究報告書 P. 259~P. 262平成23年3月

県立今治病院

日本文原著

1. 川上秀生, 河野珠美, 藤田鉄平, 大下 晃, 松岡 宏, 徳永伸子, 武田由貴恵,
菅田成紀
冠動脈CTで高度石灰化を有する冠動脈病変の狭窄評価における同CTデーターを用い
た左室心筋血流解析の有用性の検討
臨床今治 23: 11-18, 2011
2. 川上秀生, 大下 晃, 河野珠美, 藤田鉄平, 松岡 宏

収縮力保持型心不全と収縮力低下型心不全の臨床的相違点の検討

愛媛医学 30：35-39, 2011

日本文症例報告

1. 藤田鉄平, 川上秀生, 河野珠美, 大下 晃, 菅田成紀, 松岡 宏

64列MDCTの安静時血流イメージングによる心筋虚血評価が有用であった高度石灰化を有する狭心症の一例

愛媛県立病院学会々誌 45：3-6, 2011

2. 川上秀生, 大下 晃, 河野珠美, 藤田鉄平, 松岡 宏

心臓CTで脂肪変性が明瞭に観察された不整脈原性右室心筋症の1例

心臓 43：661-667, 2011

3. 河野珠美, 川上秀生, 松岡 宏

長時間経過した大伏在静脈グラフトは光干渉断層法ではどのように観察されるか？
：血管内視鏡との比較

冠疾患誌 17：212-216, 2011

日本文総説

1. 岡山英樹, 稲葉慎二, 松岡 宏

冠動脈プラークイメージング2011

冠疾患誌 17：133-140, 2011

2. 松岡 宏

血管内視鏡によるプラークイメージング

Mebio 28：34-45, 2011

日本文著書

1. 松岡 宏

ステント血栓症：興味深い症例

心臓血管画像MOOK 4

メディカルビュー社, 東京 69-73

2. 松岡 宏

血管内視鏡の手技と臨床

冠動脈での位置情報の把握と記録

血管内視鏡最新診療ガイド

メディカルビュー社, 東京 26-29

3. 川上秀生

血管内視鏡の手技と臨床

血流維持型 吸引カテーテルを用いた手技

血管内視鏡最新診療ガイド

メディカルビュー社，東京42-43

4. 川上秀生

血管内視鏡の手技と臨床

病態を把握する 冠動脈バイパスグラフトの評価

血管内視鏡最新診療ガイド

メディカルビュー社，東京 96-101



県立中央病院

英文原著論文

1. Inoue K, Okayama H, Nishimura K, et al.

Right ventricular septal pacing preserves global left ventricular longitudinal function in comparison with apical pacing : analysis of speckle tracking echocardiography.

Circ J. 2011;75 : 1609-15.

2. Saito M, Morioka H, Yoshii T, Hiasa G, Okayama H.

Visualization of an anomalous left main coronary artery stenosis using transthoracic Doppler echocardiography.

Eur J Echocardiogr. 2011;12 : 553.

3. Inaba S, Okayama H, Higashi H, Nishimura K, Inoue K, Ogimoto A, Higaki J.

Usefulness of transthoracic Doppler echocardiography for noninvasive assessment of coronary blood flow in a patient with symptomatic myocardial bridging.

Eur J Echocardiogr. 2011;12 : E15.

4. Inaba S, Inoue K, Higashi H, Ohshima K, Nishimura K, Ogimoto A, Higaki J, Okayama H.

Coronary steal detected by transthoracic Doppler echocardiography.

Eur J Echocardiogr. 2011;12 :E36

5. Higashi H, Inaba S, Nishimura K, Hamagami T, Fujita Y, Ogimoto A, Okayama H, Higaki J.

Usefulness of adjunctive pulse infusion thrombolysis after failed aspiration for massive intracoronary thrombus.

Can J Cardiol. 2011; 27 : 869.e1-2.

6. Inaba S, Okayama H, Takahashi T, Higashi H, Nishimura K, Inoue K, Ogimoto A, Higaki J.

A cluster of black holes and multiple plaque ruptures on optical coherence tomography 13 years after bare-metal stent implantation.

Int J Cardiol. 2011;152 : e47-8.

日本文原著論文

1. 渡部潤一, 佐藤澄子ほか

維持期高齢心疾患患者は体力だけでなく「ころばない自信」も低下している

日本心臓リハビリテーション学会雑誌 第16巻 第2号 P218-221

日本文総説

1. 岡山英樹, 稲葉慎二, 松岡 宏

冠動脈プラークイメージング2011

日本冠疾患学会誌2011;17 : 133-140

2. 井上勝次, 檜垣實男, 岡山英樹

最新心エコー.

Rad Fan 2011 : 9 ;33-36

3. 井上勝次, 岡山英樹

ストレインでみる拡張機能

心エコー2011 : 12;1102-1109



市立宇和島病院

英文原著論文

1. Shigematsu Y, Hamada M, Nagai T, Nishimura K, Inoue K, Suzuki J, Ogimoto A, Higaki J

Risk for atrial fibrillation in patients with hypertrophic cardiomyopathy : association with insulin resistance.

J Cardiol 58 : 18-25, 2011.

2. Ohshima K, Ikeda S, Kadota H, Yamane K, Izumi N, Kawazoe H, Ohshima K, Hamada M.

Cavity volume of ruptured plaque is an independent predictor for angiographic no-reflow phenomenon during primary angioplasty in patients with ST-segment elevation myocardial infarction.

J Cardiol 57 : 36-43, 2011.

日本文原著論文

1. 濱田希臣

平成22年度市立宇和島病院健診結果とその解析－循環器疾患の予防のために－
南予医学雑誌 12：45-55, 2011.

その他

1. 濱田希臣

心筋症「診療ガイドダイジェスト」
治療（臨時増刊号）93：38-39, 2011.



松山赤十字病院

英文原著英文

1. Kazuo Murakami, Tomikazu Fukuoka, Eisuke Yokota

Effects of the 6-Month Cilnidipine Therapy on Urinary 8-iso-Prostane in
Essential Hypertensive Patients
Therapeutic Research 32：531-538, 2011

日本文原著論文

1. 村上一雄, 横田英介

コレステロール吸収の指標と血中中性脂肪値の関連に関する検討
松山赤十字病院医学雑誌 36：21-26, 2011

日和田邦男

日本文原著論文

1. 松浦秀夫, 日和田邦男, 荒川規矩男

わが国の基幹病院における病院食の食塩量に関するアンケート調査結果(2)
血压18：60-65, 2011

2. 荒川規矩男, 後藤 励, 中山健夫, 宮崎喜久子, 當山まゆみ,

荒井優気, 日和田邦男, 荻原俊男, 島本和明, 上島弘嗣, 西村周三
高血圧治療行動に関する研究－良好な血圧管理へ向けた行動変容ステージごとの分析
血压18：388-392, 2001

その他

1. 日和田邦男

尿中ナトリウム排泄量と血圧変化, 心血管病発症予後
血压18：602-603, 2011.

新入医局員

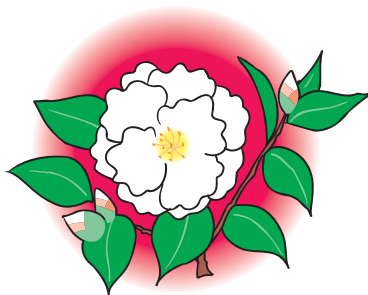
[自己紹介文]

山 本 千 恵

本年度より第2内科呼吸器グループに入局しました山本千恵と申します。この場をお借りして入局のご挨拶をさせていただきます。

私は愛媛県東温市（旧重信町）の出身です。小学校の帰り道には医学部構内で、休日には家の近くの愛媛病院の敷地内でほぼ毎日遊んでおり、秋にはときおり愛媛病院に落ちていた栗を拾って家で栗ご飯を作ってもらい食べていたものです（この場を借りて謝罪します）。高校で松山市の松山東高校に進学した後、縁あって再び東温市に戻り、愛媛大学医学部に進学しました。呼吸器内科に興味を持ったのは5回生の臨床実習がきっかけです。卒業後、愛媛大学医学部附属病院、愛媛県立中央病院での初期研修を経て、さまざまな科の中で迷いましたが、原点に返り呼吸器グループへの入局を決めました。

現在は愛媛大学医学部附属病院にて勤務中であり、呼吸器グループを始めとした多くの先生方のご指導の元、非常に充実した日々を送っております。まだ知識、技術、精神全てが未熟であり、先生方やスタッフの皆様方に迷惑をかけてばかりです。医師として第一歩を踏み出した日から、周りの人の助けなしに生きていられた日は一日もありません。少しでも早く成長して、皆様に助けていただいた分のお返しをできるようになればと思っています。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



生まれました!



2012年10月26日に長女あかりが生まれました。名前の通り、いつも我が家を明るく照らしてくれています。同窓会の先生方、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

愛媛大学大学院 病態情報内科学

大 島 弘 世



編 集 後 記

2012年を振り返ると衆院選で自民党が圧勝し与党に返り咲いたこと、ロンドンオリンピック、尖閣諸島や竹島の問題などいろいろありましたが、特に最も興味を持ったのはiPS細胞を作製した京都大の山中伸弥教授のノーベル生理学・医学賞受賞ではないでしょうか。

さて、毎回快く執筆を引き受けてくださる同窓会の先生方、若干遅くなりましたが、おかげさまで今年も同窓会ニュースを発行することができました。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

広報委員 片山 均、井上 勝次、川上 秀生、岩田 猛